

「蝦夷戦争から平泉文化へ～激動の時代にタイムスリップ～」

平成 24 年度の生涯学習研修旅行は、秋が深まる 10 月 21 日から 23 日、東日本大震災からの復旧復興が進みつつある東北地方の史跡を急ぎ足で巡った。古代東北を知る上で重要な城柵である志波城跡、払田柵跡、多賀城跡、時代は下って奥州藤原氏が栄華を極めた平泉の世界文化遺産と盛り沢山の研修となった。とくに今回は、生涯学習応援講座「リレー塾」で事前学習を行い、現地では第一線の地元研究者から丁寧な解説をいただいたことから、蝦夷戦争から平泉文化までの歴史認識を幅広く深めることができた。

第 1 日目 (10/21)

正午、総勢 22 名が盛岡駅に集合。早速、貸切バスに乗り、最初の訪問先である「盛岡市遺跡の学び館」に向かう。最初に千田和文さん（館長補佐）から陸前高田市を中心とした被災文化財救援活動について説明を受ける。館内の発掘現場を再現した竪穴住居や展示資料などについても解説をいただく。企画展示室では前九年合戦終結 950 年記念「検証！厨川柵（くりやがわさく）」が開催されており、奥州藤原氏のルーツである安倍氏が築いた「厨川柵」の所在地の検証を目的とした展示も併せて見学することができた。

続いてバスで 10 分、坂上田村麻呂が延暦 21(802)年に造営した陸奥国最北端の古代城柵「志波城跡」（昭和 59 年国史跡指定）に到着。案内役の今野公顕さん（盛岡市教委）の出迎えを受ける。「志波城古代公園」として整備され、外郭南門（高さ 11m）の両側には堅固な構えの復元築地塀、さらに築地塀を跨ぐように櫓も 60m 間隔に復元されている。築地塀の内側からは、蝦夷対策のため坂東諸国から徴発された鎮兵（ちんぺい）の宿舎であった多くの竪穴住居も発見され、「上総」と書かれた墨書土器も出土。南大路の北には政庁跡（150m 四方）が復元され、彼方に見える岩手山を田村麻呂はどんな想いで眺めたのか。都は平安京に遷り、桓武天皇の時代！悠久の歴史が最近のここのように感じられる。

陸奥から出羽へ、八幡平アスピーテラインの紅葉は真っ盛り。何回かバスを止め、色鮮やかな見渡す限り落葉広葉樹の世界にどっぷりと浸る。まもなく初日宿泊地「後生掛温泉」に到着。「馬で来て下駄で帰る後生掛」と謳われる効用の高い名湯。千葉からの長い一日の疲れを癒し、改めて参加者の方々の自己紹介を聞きながら、夕食のひとときを楽しむ。湯治場にもかかわらず、秋の夜長をたっぷりと味わう方々も多数。



志波城跡にて説明



外郭南門と築地塀



後生掛温泉の紅葉

第 2 日目 (10/22)

朝日に映える見事な紅葉を目に焼き付けながら、一路、「払田柵跡」（大仙市）へ。最初に秋田県埋蔵文化財センターにて、調査課長の小林克さんから施設紹介をしていただ

く。館内では企画展『一千二百年前の八郎湖岸開拓—小谷地遺跡の灌漑—』が開催。灌漑堰として使用された数段に束ねられた矢板を見て、その本物の迫力に釘付けとなる。

続いて道路を挟んで向かい側にある弘田柵跡(国史跡)に向かう。総面積約 87.8ha に及ぶ広大な独立丘陵を総延長 3.6 km の材木(角材)堀が囲む。なぜか文献資料に該当する記載がなく、古くから謎を秘めた城柵として知られる。柵内の総合案内所では、柵木の実物資料、全体像の模型などを見学。その後、復元された外柵南門をくぐり、大路を進み、さらに木橋を渡り、丘陵裾の外郭南門に至る。両脇には律令国家の威厳を誇示するかのよう石塁と築地堀が築かれ、石段を登ると政庁中心の平坦部。北方には広々とした仙北平野、遠くには奥羽山脈が一望され、たっぷりと古代城柵の雰囲気を感じてみる。



弘田柵跡 外柵南門



外郭南門と石塁



政庁跡

次の目的地は平泉！ 再び出羽から陸奥へ、秋田自動車道から紅葉の名残を眺め、ボリュームたっぷりの昼食をとりながら、予定を少し遅れて到着。ご存知のとおり平泉は、奥州藤原氏が栄えた平安末期の寺院や遺跡の宝庫。そのうち5か所(中尊寺、毛越寺、観自在王院、無量光院、金鶏山)が「平泉、仏国土(浄土)を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」として平成 23(2011)年 6 月にユネスコの世界文化遺産に登録されている。

最初に訪れたのは柳之御所資料館。ここから秋田敏影さんご夫婦が合流。平泉文化センター所長の及川 司さんと島原弘征さんから奥州藤原氏に関する歴史資料と考古資料の説明を受ける。その後、平泉遺跡群調査事務所の櫻井友梓さんの案内で、北上川右岸に展開する柳之御所遺跡の壕、池、建物群などを現地見学。初代清衡が居館を構えた「吾妻鑑」記述の平泉館の跡とされる。続いて無量光院跡。三代秀衡が宇治平等院の鳳凰堂を模して建立した壮大な寺院として知られる。現在ではひっそりと池跡、中島、堂礎が残っているだけだが、ちょうど訪れた時に、中島周辺整備に向けた再調査が行なわれており、幸運にも当初予定にはない発掘調査の現場を見学。礎石を固定した根石に感激！



柳之御所遺跡 正面は金鶏山



無量光院跡 発掘調査の様子

再び貸切バスに乗って中尊寺へ。慈覚大師円仁によって開山され、初代清衡が再興。

往事には多くの堂が建ち並び、国宝の金色堂は天治元(1124)年に造営されたと伝えられ、当日も大変な混雑ではあったが、皆、金色の阿弥陀堂に目を奪われる。さらに讃衡館では貴重な宝物も見学し、早足で月見坂を下って中尊寺を後にする。

次に向かった毛越寺は、中尊寺と同じく、慈覚大師円仁により嘉祥3(850)年に開山され、二代基衡が再興、三代秀衡によって完成。浄土庭園は当時の様式を残す貴重な文化財として特別史跡および特別名勝に二重指定されている。表門前で平泉文化遺産センターの菅原計二さんに迎えられ、ゆっくりと庭園を一周しながら懇切丁寧な説明を受ける。浄土庭園の南大門跡では目の前に「大泉が池」が広がる。当時の建物は残っていないが、大規模な庭園であったことが彷彿され、南大門から中島に向かって、橋が架かっていた往事の情景が目に見え。対岸の金堂跡などの礎石はほぼ完全に残り保存状態はすこぶる良好。池の北東部からは全国的にも珍しい遣水遺構が発見され、再整備されてからは毎年、曲水の宴が催されているとのこと。池の水際には様々な海岸の風景が表現され、とりわけ東南岸にある荒磯風の出島と、その先端に据えられている立石の姿は最も美しい景観となっている。今回、何といたっても特筆すべきは、東日本大震災の影響で立石の傾きが増したことから、保存修復に向けた大規模な発掘調査が行われていたことである。出島の周囲を土のうで囲み、池底まで水が抜かれた状態となっていた。出島の設置当時の全体像を眼前にして、しかも調査を担当した菅原さんから直接の説明を受けながら見学することができ、滅多にない貴重な経験となった。夕暮れ迫る中、隣の二代基衡の妻が建てた観自在王院跡に向かい、急ぎ足で菅原さんから南門跡で説明をいただき、名残を惜しみつつ平泉を後にして、松島のホテル大観荘に向かう。

夕食会では、同行された河原純之さんから平泉文化の講義をいただき、松島湾の海の幸を味わいながら、のど自慢の方々によるカラオケ大会も盛大に開催され、参加者一同、松島の夜を楽しみながら一層の親睦を深める。



毛越寺浄土庭園の説明



遣水遺構



出島石組 発掘調査の様子

第3日目 (10/23)

あいにく小雨の中のスタート。希望者は出発前の時間を利用して、大震災の爪痕が残る松島海岸、瑞巖寺を見学。その後、東北歴史博物館に向かう。天候状況から予定を変更して午前中に多賀城跡を訪問。案内役は東北歴史博物館で館長をされた進藤秋輝さん。奈良時代には鎮守府も置かれた蝦夷戦争の拠点、陸奥国府・多賀城(特別史跡)は、神亀元(724)年に大野東人によって創建。長年の発掘調査によって一辺が約1km前後の四角形に近い築地塀に全域が囲まれ、ほぼ中央に政庁跡があったことが明らかとなっている。

「松島や あー松島や 松島や」松尾芭蕉も松島に向かう数日前に立ち寄った多賀城碑(重要文化財)は、外郭南門近くの小さな覆堂の中にひっそりと立っている。多賀城

跡調査研究所の特別のご好意により覆屋の扉が開けられ、碑文を目の前で観察。参加者一同、一気に奈良時代にタイムスリップ。碑文には京、常陸国などからの距離、多賀城創建と改修の由来が、ほとんど摩耗することなく鋭く刻まれていた。

外郭南門から政庁につながる南北大路は、なだらかな丘陵をまっすぐ突っ切るように続く。丘陵斜面からは自然石を並べた階段となり、登り切ったところが政庁跡。建物配置は中央に正殿、その手前両側に脇殿、南正面には南門などがあり、正殿南には石敷広場が配置。正殿跡では東日本大震災で亀裂・陥没などの損傷を受けたため、復旧工事に伴う再発掘調査が約40年ぶりに実施されていた。平泉に続いて、ここでも発掘調査現場を見学。デスクワークも必要だが、フィールドワークの素晴らしさを改めて実感。



多賀城碑



丘陵斜面の石段



正殿跡の発掘調査

現地研修の最後に多賀城跡から南東約1.2kmの位置にある多賀城廃寺跡（特別史跡）を見学。多賀城の附属寺院として多賀城と同時に創建。築地や塔の基壇、金堂、講堂などの礎石もよく残り、現在は史跡公園として整備。近くの山王遺跡から「観音寺」と書かれた墨書土器が発見されたことから、この寺院は太宰府の附属寺院と同様に観音寺と呼ばれていた可能性が指摘されているとのこと。



多賀城廃寺跡 塔礎石

東北歴史博物館へ戻り、博物館から特別に提供していただいた研修室で昼食を済ませ、総合展示室を見学。ゆったりとした立派な展示室で多賀城などの復元模型、展示資料を中心に見学。「多賀城とその周辺」のコーナーには多賀城碑のレプリカが展示されており、改めて進藤さんから彫り込まれている碑文の解釈について詳細な解説をいただく。研修室に戻り、進藤さんと多賀城跡調査研究所長の佐藤則之さんからのご挨拶をいただき、名残を惜しみながら東北歴史博物館を後にする。交通渋滞もなく、予定通り午後3時、仙台駅で解散。参加された24名の皆さん、本当にお疲れさまでした。

短くも長い、それでもあっという間の3日間でしたが、参加者の皆さまのご協力で、本当に楽しく充実した研修旅行となりました。今回の研修旅行に際し、温かいご配慮と研修指導をいただいた研究者の皆さまに心から厚く御礼申し上げます。